

研究展望(平成14年)

橋本, 朝生

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute
of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 / 能楽研究

(巻 / Volume)

28

(開始ページ / Start Page)

119

(終了ページ / End Page)

132

(発行年 / Year)

2004-04-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002854>

研究展望（平成十四年）

橋本 朝生

この年、能楽専門の学術団体として「能楽学会」が発足した。学会の意義については竹本幹夫氏「能楽学会発足によせて」（『文学』隔月刊3・4・7月に詳しく、ここで繰り返す必要はあるまい。紅猫氏「能楽学会」の設立」（『芸能史研究』157。4月）を初めとして学会に対する要望が各方面から寄せられているが、発足と同時にすべての期待に応えることはできない。徐々に力をつけ能楽研究を推進する核となっていくものと思う。六月二九・三〇日に開かれた第一回の大会では伊藤正義・表章氏による講演と九本の研究発表があり、バラエティーに富んだ内容で、能楽研究の様々な分野での現在の水準が示された。それらの多くは学会の機関誌等で翌年活字化されるので、本稿で個々に取り上げることはしない。

もう一つ注目すべき動きとして世阿弥の名を冠する雑誌「Z E A M I」の創刊がある。「中世の芸術と文学」の副題があり、能楽に限るものではないようだが、創刊号（A5判24頁。1月。森話社。二四〇〇円）は「世阿弥とその時代」の特集で、渡邊守章氏と編集の松岡心平氏による対談、丸谷才一・久保田淳氏のエッセイ、高橋睦郎氏の詩、水原紫苑氏の

短歌の他、八編の論文が掲載されている。若手研究者による力作が目立つが、論文については「論文」の方で個々に取り上げることとしたい。ただ創刊時には年二回刊行の予定であったのが、2号は翌年に持ち越し、早くもペースダウン気味である。順調な継続を期待したい。

では以下、この年の成果を単行本・論文にわけ、多分に便宜的にだが分野ごとに見ていくこととする。

単行本

『磯馴帖 松風篇・村雨篇』（伊藤正義監修・磯馴帖刊行会編。二冊。A5判333・488頁。7月。和泉書院。四〇〇〇円）

『伊藤正義先生古稀記念古典資料集』である。伊藤氏の研究の幅広さに対応した幅広い分野での入手しがたい資料が集められ、能楽関係は「松風篇」に収められる。小林健二氏「謡絵本松風」は、大阪女子大学蔵「謡曲松風」のカラーの影印。能（松風）を奈良絵本に仕立てたものの一つで江戸初期のものである。味方健・堀口康生・樹下文隆・大山範子氏「謡秘事哥袋」は、伊藤正義氏蔵の謡の稽古の要点を和歌に

詠んだ道歌集の翻刻。天野文雄・関屋俊彦・山村規子・稲田秀雄・小林英一・伊吹美保子氏「遊音抄」は、天理図書館蔵の室町後期写の下掛り五十番摘謄本の翻刻。それぞれに解題が付される。いずれも貴重な資料だが、ことに「遊音抄」は下掛り謄本の摘本として最古のものであり、ありがたい。

『梅若実日記』——四（梅若実日記刊行会編。A5判27・417・447・421頁。1・4・9・10月。八木書店。各二、〇〇〇円）

明治三名人の一人、初代梅若実の日記の刊行が始まり、全七巻のうちこの年に四巻まで出て、嘉永二年から明治三年までを収める。古川久氏「明治能楽史序説」（昭和44年。わんや書店）などに利用されているが、幕府瓦解による危機から近代能楽の復興にいたる維新期の能楽史、さらに広く文化史・生活史を知りうる好資料である。難読の資料が容易に読めるようになった。

『夢幻能の方法と系譜』（飯塚恵理人著。A5判12頁。3月。雄山閣出版。一六八〇〇円）

著者による能の作品研究の集成。第一部「世阿弥自筆能本の形態をめぐって」、第二部「能と先行文芸」、第三部「夢幻能の方法」の三部に分け、一四編の論文を収める。世阿弥を中心に元雅・禅竹らの夢幻能を対象とし、その成立の基盤や方法を論ずる。世阿弥自筆能本の形態から入り、夢幻能の方法に及んで説話・古注釈の舞台化と捉えるにいたるが、既発表の個別の作品研究が並び、それらを通して夢幻能全体を捉えた標題のような説明がなされているのかどうか疑問が残る。

これに「資料編」が付され、西村本「問之本」や「高安流仕舞附」の翻刻があるが、後者に付記が補われるもののこれらも既発表のものの再録で、その上本編の考察とどう関係するのか、一書の編み方としてこれも疑問である。

『謡リズムの構造と実技——能・地拍子と技法』（横道萬里雄著。A5判237頁。3月。檜書店。二五〇〇円）

能の演出研究書。地拍子の解説と実技への応用が、門外漢にはわかりやすいとはいえないが、懇切丁寧に説かれる。清田弘氏の新刊紹介「観世」（7月）、西哲生氏の書評「楽劇学」（10、平成15年3月）がある。

『根来寺の能面』（田邊三郎助監修。B5判136頁。5月。淡交社。二四〇〇円）

和歌山県の根来寺に蔵される紀伊徳川家伝来の能面の写真集。全一五九面の写真を一部カラー（神田佳明氏撮影）とモノクロ（山口トシオ氏撮影）で収め、小泉充康・中川委紀子氏の「作品解説」を付す。他に田邊三郎助氏「根来寺所蔵紀州徳川家伝来の能面」、見市泰男氏「根来寺所蔵の能・狂言面修復について」を収める。

『処世術は世阿弥に学べ』（土屋恵一郎著。新書判104頁。2月。岩波アクティブ新書。七〇〇円）

研究書ではないが、能楽論にかかわる書としてあげておく。世阿弥の能楽論を現代のビジネスパーソン向けの「人生戦略論」として説いてみせる。

『中世芸能を読む』（松岡心平著。四六判107頁。2月。岩波

セミナーブックス。二二〇〇円)

「勸進による展開」「天皇制と芸能」「連歌的想像力」「禪の契機―バサラと侘び―」の四章から成る。この四つの切り口から中世芸能を論ずるもので、能・狂言が直接取り上げられることは少ないが、当然のことながら常に意識されている。

能・狂言の根底を解明するものとして刺激的である。松岡氏にはこの他「中世文化の美と力」(共著。日本の中世7。四六判334頁。10月。中央公論新社。二六〇〇円)の第3部「立つこと―中世的空間の特異性」があり、立花や庭園の立石から始めて、世阿弥・禅竹に及ぶ。

「遊戯から芸道へ 日本中世における芸能の変容」(村戸弥生著。A5判336頁。2月。玉川大学出版部。六五〇〇円)

主として蹴鞠を扱う研究書だが、総体として中世芸能の遊戯から芸道への変容を説くもので、能に及ぶ。いま総体としての芸能史についてはおいて能に限れば、「小鍛冶」と魔曲「鞠」の生成を論じた論文を収め、「鞠」は蹴鞠との関連で取り上げられる。一書全体で芸能の身体的側面の研究が強調されるが、能に限っては従来の研究の域をあまり出ない。

「平家物語から浄瑠璃へ―敦盛説話の変容」(佐谷真木人著。A5判318頁。10月。慶応義塾大学出版会。四〇〇〇円)

第一部「平敦盛像の成立と展開」の第三章「謡曲「敦盛」「経盛」「生田敦盛」で、敦盛説話の変容の中に能(敦盛)等を位置付け、能において敦盛に人格が付与されたとする。その他、「平家物語」を出典とする能への言及がある。

「鎌倉室町文学論纂」(石川透・岡見弘道・西村聡編。A5判719頁。5月。三弥井書店。一八〇〇〇円)

「徳江元正退職記念」と冠する論文・資料集。能楽とかかわるものが多いが、直接能を扱うのは二編。「論文」の方で取り上げる。

「国立能楽堂収蔵資料図録(2)文・絵画Ⅱ」(国立能楽堂調査養成課調査資料係編。A4判174頁。3月。国立能楽堂)

前年のⅠに続くもので、光悦謡本(大原御幸)や「弘化勸進能絵巻」などの資料をカラー図版で収め、解題を付す。画像データCD-ROMも付される。国立能楽堂所蔵の貴重書、文献・絵画の一覧を付載。国立能楽堂が絵画資料等を収集・展示するだけでなく、こうした形で公開するのはまことにありがたい。なお国立能楽堂の特別展示の図録に「浮世絵にみる能・主題に因む受容と変貌」(A5判52頁。10月)がある。

「須田国太郎能・狂言デッサン」総目録」(天野文雄作成。A5判40頁。3月。大阪大学文学研究科)

昭和前期の洋画家須田国太郎の能・狂言のデッサン約五千枚が大阪大学に寄贈された、その目録。近代の絵画資料である。なお「須田国太郎能・狂言デッサン展」が開催され、その図録(A4判32頁。4月。伊丹市立美術館)もある。

「佐渡鷺流狂言(天田本)」三(八(佐渡鷺流狂言研究会編。A5判130・114・130・116・124・114頁。1・1・8・8・8・8月。真野町教育委員会。非売品)

両津市の天田保氏所蔵の狂言台本の翻刻。明治末年に鷺畔

翁等に師事し、昭和一九年に没した天田狂楽の収集した台本。前年の1・2と合せ、計八冊で、一六二曲所収。翻刻者は本間祐亨氏。

『佐渡鷺流狂言(天田本)』小習、重習ほか、『鷺流狂言秘伝書(天田本)』(佐渡鷺流狂言研究会編。A5判114・222・168頁。2・2・3月。佐渡鷺流狂言研究会。非売品)

前項の狂言台本翻刻の姉妹編。『小習』は(粟田口)以下全一六曲所収。『重習ほか』は重習・大習・別習の(通口)以下全一二曲(二曲重複)と一番本等の(桑山伏)以下二四曲所収。『秘伝書』は小習・重習・奥習の二三曲の台本と(鱧庖丁)以下六曲の語り。翻刻者は同じく本間祐亨氏。

『狂言変遷考』(永井猛著。A5判408頁。3月。三弥井書店。九八〇〇円)

著者による狂言研究の集成。1「作品研究」には中世古注釈とかかわる(禁野)(右流左止)、南部彌直流の(大小)狸腹鼓、初期歌舞伎とかかわる(業平餅)などを取り上げた論文を収め、2「台本研究」には祝本・宝暦名女川本・伊藤源之丞本等を考察した論文を収める。(大小)については、早く文献資料によってその復元を図った論に、近年の絵画資料を見出している考察が続く、狂言と初期歌舞伎の交渉が明らかにされる。祝本は鴻山文庫に埋もれていた台本で、氏によって見出され、天正本と江戸初期諸台本との間に位置する台本とされたもの。資料編に、翻刻と、初出時にはなかった影印を収める。氏の論は周到で、宝暦名女川本の論にいたっては、筆

者特定の範囲を越えて名女川家、さらに師家鷺伝右衛門家歴代の事績にまで及ぶ。この書を編む際にも既発表の二つの論文を一つにまとめるなどの組替えがなされ、また付記によって現時点での見解が示される。なお藤岡道子氏(芸能史研究)159。10月、田口和夫氏(楽劇学)10の書評がある。

『狂言のことだま』(山本東次郎著。四六判262頁。9月。玉川大学出版部。二〇〇〇円)

役者による狂言論だが、ここにあげるべきものであろう。

『狂言のすすめ』(昭和53年)の続編。東次郎氏がいま狂言を演ずる意味が問われる。話は間狂言・三番三に及び、先代の『間狂言の研究』(昭和16年。わんや書店)の続編でもある。

『太郎冠者・山伏行状記』(野上豊一郎著。法政大学能楽研究所編。四六判265頁。檜書店。一三〇〇円)

狂言物語とでも言うべきものであり、当研究所五十周年記念出版で手前味噌でもあるがあげておく。野上氏の『太郎冠者行状』(昭和21年。生活社)は狂言入門書として評価が高かったが、当研究所に寄贈された野上氏の蔵書の中に、その続編とおぼしき「山伏行状記」の原稿が見出された。そこでこれらに氏の狂言論「狂言の風刺と諧謔」(『文学』昭和22年8月)を合せて、野上氏の狂言著作集としたもの。「山伏行状記」は山伏狂言各曲を一人の山伏の体験記のように配したもので、「朝の目ざしの爽やかな竹敷の中に山伏はよい気持で眠っていた」(蝸牛)といった美しい文章が綴られる。入門書としてお勧めしたく、なくもがなの注が付いている(私が付

けたのだが」のも年少者向けに配慮したものである。なお天野文雄氏の紹介(『学鑑』平成15年4月)がある。

「犬は「びよ」と鳴いていた―日本語は擬音語・擬態語が面白い」(山口仲美著。新書判27頁。8月。光文社新書。七四〇円)

日本語の擬音語・擬態語の成り立ち・歴史を平易に説くもので、第二部「動物の声の不思議」に狂言の例が多く引かれる。ただし(釣狐)と(こんかい)を別曲のように扱う不思議な記述もある。

論文

【資料紹介・資料研究】

謡本では、金春安明氏「永正三年本(玄上)」は明和頃の書写か?」(『観世』2月)が観世文庫蔵の永正三年奥書の(玄上)の仮名遣いを検討して、明和頃の書写とする。表章氏の「金春安明氏の論文を読んで」が付され、これを認め課題を提起する。小秋元段氏「表紙裏の謡本」(『鍬仙』502。4月)は、古活字本「史記」の表紙の裏張に用いられた謡本を検討する。「表紙裏が資料の宝庫」なのだとのことだが、他人の蔵書の表紙をはがして見ることもできず、たくさんの資料が埋もれているらしい。

伝書の類。山本和加子氏「山岸文庫蔵『謡秘伝抄』解題」(『実践女子大学文芸資料研究所年報』21。3月)は、寛文五年日吉空庵の奥書のある標題の書の解題で、日吉空庵は仮託

であり、版本や写本で流布した謡伝書「謡之秘書」系統にある特異な一本であるとする。飯塚恵理人氏「新城川村類造田蔵本「高安流脇仕舞附」(五)」「(名古屋芸能文化)」12。12月)は、標題の書の翻刻の五回目で、これで完結。

松田存氏「増補新訂・謡曲作者考定基礎資料一覧(表一)(総合芸術としての能)」8。8月)は、謡曲作者付の一覧の増補版。城崎陽子氏「翻刻」初代梅若実「履歴略書」(武蔵野女子大学「能楽資料センター紀要」13。3月)は、前述の「梅若実日記」の梅若実による「履歴略書」の翻刻。

坂本清恵氏「近代語の発音―謡曲伝承音との関係」(『国語と国文学』11月)は、国語学的研究で、ところをえないが、ここにあげておく。「イウ」を割って発音するなどの謡の発音について、世阿弥自筆能本の表記を検討して当時の口頭語を伝承してきたものかどうかを検討する。

【能楽史研究】

古い方から。五味文彦氏「永仁の前奏曲―世阿弥の時代へ」(『Z E A M I』1)は、鎌倉後期、中でも永仁期の社会変動が世阿弥の能の源流となったとする。脇田晴子氏「中世猿楽座の組織構成」結崎座・円満井座の座規約を中心に「(同前)は、結崎座・円満井座の座の規定を検討し、入座年齢構成である脇次による中世的な職種共同体というべきものであるとし、円満井座の方が古態を残しているとする。

世阿弥関連では、松岡心平氏「世阿弥と東大寺経弁」(同

前)は、少年期の世阿弥について記す二条良基の書状の宛先「尊勝院」が名僧として知られた経弁であることを明らかにし、世阿弥が力を得たのも経弁とのかかわりによるとする。天野文雄氏「足利義持の治世と世阿弥・義持と後小松父子との関係をめぐって」(『演劇学論叢』5。12月)は、天龍寺慈濟院蔵の足利義持の肖像画の賛や義持筆の「騎驢人物図」と諸記録とを照し合せて義持に聖君の補佐役を勤めたいという対治天意識があったことを読み取り、その君臣・体的な公武関係が世阿弥の脇能に影響しているとする。氏の世阿弥の能作をめぐる論の一環となる。天野氏にはこの他「少年世阿弥の「異能」——「醍醐寺新要録」所引「隆源僧正日記」の記事をめぐって」(『鉄仙』500。2月)があり、「隆源僧正日記」の世阿弥の少年期についての記述を「異能」と読み、芸風との関連を考える。

室町後期については、小林健二氏「宇都宮二荒山神社蔵『遷宮日記』における能楽記事の史料の意義」(『芸能史研究』157。4月)がある。「遷宮日記」は永享から天文にかけての二荒山神社の式年遷宮の際の芸能の記録。その原本を調査して錯簡を修正した上で、上演の初出例と認められるものがあること、古演出の資料となること、中央の四座の役者がかわっていたことなどを指摘して、当時の関東での演能記録として重要であるとする。

次に江戸時代。表章氏「大鼓金春流」(考(下の一))——金春三郎右衛門家の歴代、他——(『能楽研究』26。3月)は、大

鼓金春流の家元金春三郎右衛門家の歴代を追う長大な論文で、(下の一)は八世、八世の養子三助、九世錦蔵の事績を追って、家の断絶までを扱い、分家・弟子家に及び、金春伝蔵家の事績を追う。三ツ石友昭氏「露月と宝生活圃——絵俳書を中心として」(『演劇学論叢』5)は、江戸中期の俳人で絵俳書を刊行した露月が謡の師匠でもあり、宝生家八世の三男活圃らと親交があったことを明らかにし、謡と俳諧の文化圏の重なりがあったとする。

江戸以外の地における史的研究では、宮本圭造氏「中村如水と坂田藤十郎——元禄歌舞伎の周辺——」(『芸能史研究』156。1月)は、坂田藤十郎の歌舞伎の「狂言ノ談合」に加わった中村如水が京都の小鼓役者であることを明らかにし、同氏「能大夫小島了達とその一族——江戸前期京都能界の一面——」(『芸能史研究』157)は、禁裏能大夫として知られる小島了達の事績を追って、いずれも町人たちが能に熱中した江戸前期の京都の能楽界の様子を浮かび上がらせる。小林健二氏「江戸時代における大坂の能役者」(『上方文化研究センター研究年報』3。3月)は講演の記録で、大坂の能役者の動向を概観し、資料を付す。中川桂氏「大坂の惣年寄記録にみる能記事——公私における能とのかかわり——」(『演劇学論叢』5)は、その各論とも言えるもので、大坂の町役人である惣年寄の記録から、勧進能や稽古能とのかかわりを見る。勧進能開催の次第が明らかにされ、「大坂勧進能番組」の裏側を知ることができ

る。

神原邦男氏「岡山後楽園は「観光文化財」として将来的に有用か(その二)池田綱政の能舞台築造と能舞台の役割」(『吉備地方文化研究』12。3月)は、前半で前年の(その二)に続けて岡山藩江戸藩邸での六代家宣將軍宣下の際の老中招請能の資料を翻刻して考察を加え、後半で時の藩主池田綱政が岡山の後楽園に能舞台を築造し家臣の妻女や在方・町方の者に能を見せた、その実態を明らかにする。標題の意図はともかく、岡山藩能楽史は有用であろう。宮本圭造氏「宇陀松山藩の能楽 小藩における演能の諸相」(立命館大学「アート・リサーチ」2。3月)は、これとは対照的な小藩、大和国宇陀の松山藩での演能を藩政日記「御用部屋日記」によってさぐる。藩主催の神事能や上屋敷に能舞台を築造してからの能の流行を追って、それに裨宜衆や京都の役者がかわつていったことを証し、畿内諸藩の能への展望を示す。

近代。氣多恵子・城崎陽子・三浦裕子氏「初代梅若実「履略書」に見る人間関係」(『能楽資料センター紀要』13)は、前掲「翻刻」に対応する研究。「日記」をつければ始める以前の出来事が語られていること、「日記」には表れない心情が吐露されているとする。西村聡氏「明治の能楽復興とその地方展開 金沢能楽会の設立趣意書から読み取れること」(『文学』3。5。9月)は、明治三四四年の「金沢能楽会設立趣意」を取り上げ、役者の家の事情、中央との関係などをふまえ、その設立の事情を解明して、近代能楽史の一隅を照らす。

【能の作品研究】

天野文雄氏「能はいかに説まれるべきか」(『上方文化研究センター研究年報』3)は講演の記録で、それだけに氏の主張が生にうかがえる。従来の能の研究は作品の趣向を問題にすることが多く、趣向と主題を合せた構想(作意・ねらい)に及んでいないとして、そうした意図で書かれた氏の近年の研究を紹介した上で、《熊野》を取り上げ、主題が惜春という美的感情にあるとする。この年の論文も当然同じ意図を持ち、「白楽天」と応永の外寇 久米邦武と高野辰之の所説を検証する。「(Z E A M I)」は、「白楽天」が応永の外寇を踏まえて作られたとする久米・高野両先学の所説を支持し、説話や古今注の考察を加えて、応永の外寇という国家の危機とその克服を寓意した能だとする。「住吉社と能」神事と作品をめぐって「(すみのえ)」²⁴⁵。7月)は、住吉社の神事と能との関連に触れた後、住吉社にかかわる能を取り上げ、《高砂》を当代賛美とするなど、その作意を考える。

竹内品子氏「世阿弥のドラマトウルギー」(『統一イメージ』)から「等価の原理」へ「(Z E A M I)」は、世阿弥の能の特徴を表すものとされてきた「統一イメージ」の見直しを図り、能の詞章に顕著な語の反復を「等価性」を指向するものとし、さらにそれが劇的展開にも及ぶとして、「等価の原理」の強化が世阿弥の能の特徴だとする。始まりを予感させる論。永原順子氏「謡曲における鐘の「音」」(京都大学大学院人間・環境学研究所「日本文化環境論講座紀要」4。

3月)は、氏の物狂い論の二環をなすもので、能の詞章に表れる鐘の音の意味を分析し、〈三井寺〉や〈道成寺〉の鐘と狂いの関連を考える。小川佳世子氏「世阿弥と梵灯庵試論」(梵灯庵主返答書)を中心に(『日本研究』25。4月)は、世阿弥と同世代の連歌師梵灯庵との関係をさぐり、能作と連歌にたがいに影響するものがあつたとする。大谷節子氏「能における「心」と「理」」(学燈社『国文学』9月)は、世阿弥の能の言葉を扱い、「心」と「理」をめぐる問答について考察する。

岩崎雅彦氏「猿楽の説話と鬼」(『能楽研究』26)は、猿楽の役者が登場する、また猿楽の催しを題材とする説話を網羅的にあげ、それが鬼と結びついているとし、猿楽が深く鬼とつながっているとする。竹本幹夫氏「能作者宮増の作品と作風(上)」(同前)は、宮増の能を全面的に検討しようとするもので、(上)では記録に現れる「宮益大夫」の活動を見た上で、「能本作者注文」で「宮増作」とされる一〇曲を検討し、ほぼ共通する特色として非世阿弥風の現在能的な構造を持つとする。

以下、個別の作品研究。〈実盛〉の論が三編。金忠永氏「『実盛』考―世阿弥の能楽論における「花」論に照らして―」(筑波大学『文学研究科論集』20。3月)は、能楽論とつきあわせて能の達成を見る。今泉隆裕氏「謡曲〈実盛〉の深層―民俗の中の実盛像をとらえて―」(『日本文学誌要』65。3月)は、民俗・風流の実盛像から読み解こうとする。佐伯

真一氏「実盛の「怨み」」(『鎖仙』509。12月)は、虫送りの民俗とは無縁とする。

〈知章〉の論が二編。佐々木香織氏「世阿弥の『平家物語』受容について―なぜ能「知盛」は存在しないのか―」(筑波大学『哲学・思想論叢』20。1月)は、平知盛・知章父子を扱う能が〈知章〉になったとして、知盛が現世に未練がなかったために能にはならなかったとする。世阿弥自筆本に言及するが、もちろん久次本の誤り。岩城賢太郎氏「謡曲〈知章〉における「卒都婆」と「波」と―久次本を中心に―」(『筑波大学平家部会論集』9。6月)は、その久次本によって作中の時間が知章の死後三年と設定されていることの意味を考え、須磨の浦の「卒都婆」に打ち寄せる「波」によって知章の罪を洗い流して供養するのが作意であつたとする。

三多田文恵氏「謡曲「張良」の成立とその背景」(『中国中世文学研究』41。3月)は、主たる出典である「史記」との関係を考えて御伽草子や舞曲の「張良」などの和書の世界と深く関係しているとするが、黒田彰氏の作品研究(『観世』昭和58・7)などの先行研究は顧慮されていない。同氏にはこの他、「謡曲「大般若」の成立とその背景」(『中国学論集』31。3月)「謡曲「東方朔」の成立とその背景」(同前33。12月)の、唐物の能の出典に関する、連の研究がある。

三宅晶子氏「〈融〉の引き歌考」(『文学』3。3)は、〈融〉の引き歌に意味の通じにくい箇所が目立つことを指摘して、世阿弥が遊舞能という未開拓のジャンルに挑戦した作品ゆえ

だとする。なお同氏「雲となり雨となる」(『鏡仙』506。9月)は、標題の慣用句を検討して(融)で新しい意味が与えられているとする。

山本ユリ氏「作品研究 巻組」(『芸能史研究』156)は、『沙石集』からの撰取や諺とのかわりを考え、喜阿作の可能性を見る。阿部由佳氏「能における祝言と鎮魂の要素——采女」の場合(『武蔵大学——人文学会雑誌』33—2・3。2月)は、応永一三年に春日に起った凶事を鎮めかつ將軍家への祝言とする目的で作られたとする。小林美和氏「謡曲『船弁慶』の周辺とその底流」(『帝塚山大学短期大学部紀要』39。2月)は、知盛の怨霊が出現する背景に延慶本平家物語の世界があったとする。原田香織氏「江口」の表現形成(『山形短期大学紀要』34。3月)は、出典や和歌世界とのかかわりから丁寧に読み解く。中司由紀子氏「能(鐘引)考——御伽草子を中心に——」(『楽劇学』9。3月)は、『依藤太物語』との関連を検討し、三井寺の勧進にともなって作られたものかとする。佐藤裕子氏「能『玉水』の作品研究」(『演劇映像』43。3月)は、下掛り謡本を古態とした上で、「伝心敬筆伊勢物語注」の類の理解に基づき、悲劇性を強調する創意が認められるとする。

内山美樹子氏「小篠」以前 能「正儀世守」と元曲「蝴蝶夢」——(『国語と国文学』4月)は、古浄瑠璃(小篠)に取り込まれた能(正儀世守)(庵曲)に元曲(包待制三勘蝴蝶夢)の影響があるとする。西村聡氏「(小原野花見)と足利義政」

(『鎌倉室町文学論纂』)は、(小塩)が禪竹が寛正六年の足利義政の春日社参を前に、半年前の「小原野花見」に思い当り、「伊勢物語」七六段を連想して作ったものとする。妹尾好信氏「関吹き越ゆる……」は行平歌か——『源氏物語』須磨の巻・謡曲「松風」引歌真偽考——(同前)は、『松風』に引く「関吹き越ゆる……」の歌が行平の歌とされた理由をさぐる。鎌田輝男氏「安達が原の鬼女伝説——謡曲『黒塚』のシテ像を求めて——」(『総合芸術としての能』8)は、『拾遺集』の兼盛歌の鬼に、「源氏物語」の六条御息所、異界のイザナミを加えてシテ像が造型されているとする。長崎山利子氏「音曲詞章と西行の和歌——西行遊女問答歌を中心に——」(『芸能文化史』20。10月)は、常磐津等の音曲の西行遊女問答歌が能(江口)の謡を経由して撰取されているとする。

「観世」の特集は(井筒)(仲光)(野宮)(葛城)で、「作品研究」としては、小林英一氏「仲光」(2月)、増田繁夫氏「野宮」(6月)、田中貴子氏「葛城」(11月)がある。小林氏は古い謡本や演出資料によって古態を考えて舞曲(満仲)とのかかわりを見、その後の変遷を追う。増田氏は「源氏物語」本文を取り入れつつ、本説離れを図っていることを見る。田中氏は後シテの葛城の神が女神であり、成仏しがたい存在としての女性を描くものとする。

「鏡仙」の「研究上二月往来」に載った作品研究的なもので触れなかったもの。阿部泰郎氏「海人」における(聖なるもの)——「志度寺縁起」の世界から——(30。3月)は(海人)

〈当願幕頭〉を扱い、徳田和夫氏「山伏姿の弁慶」(504。6月)は〈安宅〉を扱う。

『演劇学論叢』5号には、共同研究「観世元章の能楽改革(一)」があり、元章による謡本改訂をはじめとする明和の改革をめぐる論を載せる。橋場夕佳氏「明和改正謡本における『伊勢物語』関係曲 新註との関係を中心に」は、『伊勢物語』を素材とする作品(燕子花(杜若)などが賀茂真淵説などの新註による理解によって改訂されているとする。中尾薫氏「観世元章の〈鉄輪〉—明和改正の実態とその影響—」は、詞章ばかりでなく、装束・作り物を含めた演出の改訂を見て、その形が現代まで踏襲されているとする。天野文雄氏「明和の改正と『三説物』関係曲の演出—〈安宅〉〈正尊〉〈木曾〉の小書などをめぐって」は、現在「勸進帳」「起請文」「願書」の小書付でもつばら演じられる三説物の演出が明和の改訂によるものとする。後二編は次項にあげるべきもの。明和改正を全面的に検討しようとする、いい企画である。

『世阿弥忌研究セミナーつうしん』6号(8月)は前年の記録。このセミナーがこの年から能楽学会の催しとなるため、終刊号。「世阿弥とその周辺」の六編の報告要旨を載せる。『文学・語学』14号(9月)は全国大学国語国文学会の夏季大会のシンポジウム「演劇の東と西—日本の伝統演劇とシェイクスピア—」の記録で、上田(宗方)邦義氏「能とシェイクスピア」の講演と上田氏に田口和夫・鳥越文蔵・岡田恒雄(司会)氏が加わったパネルディスカッションを載せる。

【能の演出研究】

横山太郎氏「天女舞の身体技法—カマエ成立以前の能の身体—」(Z E A M I 1)は、世阿弥時代の天女舞の実態を考えようとする。世阿弥・禅風の伝書の記述を追って天女舞に「腰を据える」という特有の技法があったとして、現代のカマエとの関連をさぐる。最後は直感的な判断によるしかないところがあるようだが、能の技法の解明への果敢な挑戦である。重田みち氏「能の神体の出立」(鎮仙)503。5月)は、〈高砂〉などの後シテの出立を検討し、創作当時も若い神であつたろうとする。小田幸子氏「ころぶ」演技(同前507。10月)は、演技の実際を考えるもので、古型付に見られる「ころぶ」が一般的な意味で使われており、「倒れる」と同義とする。小田氏には「能の演出の変遷—台をめぐって—」(二)「国立能楽堂」225・226。5月・6月)もある。羽田昶氏「直面は素顔である」(能楽資料センター紀要)13は、「直面も仮面だ」とする言説を否定し、そのよってきたところを考える。三宅晶子氏「インタビュー—人間国宝・松本忠雄氏に聞く」(文学)3—3。5月)は、シテ方室生流の重鎮、松本忠雄氏に演技の実際を語らせる。

音楽的研究。渡辺康・一色忍・飯塚恵理人氏「能楽」59ページにおける音声ファイルの扱いと囃子の解説(相山女学園大学「文化情報学部紀要」1。3月)は、囃子の音声ファイルを59ページに載せることを検討し、〈真ノ来序〉の声紋分析を行い、楽譜を載せる。同じ三氏による「三番

聖」の楽譜化と声紋分析」(学燈社『国文学』7月)も(三番聖)の三つの部分を同様に分析する。

能面の関係では、西野春雄氏「日本美術史家フリードリッヒ・ベルチンスキー研究(1)——吉田次郎訳「日本の仮面・能と狂言」を中心に——」(『能楽研究』26)が、ベルチンスキーによる能面研究を紹介し、副題の書の再録を始める。小林保治氏「専用面の検討——「弱法師」の場合——」(『演劇研究』25・3月)は、弱法師面の諸作を見渡し、専用面であるがゆえに当該曲の解釈と演技上の主張に合せて何タイプも制作されたとする。他に保田紹雲氏「世襲面打家・大野出目家の使用した手本面」(『名古屋芸文化』12)、眞弓能裕子氏「室町時代能面の秘密を探る——「黄金比」と「大和比」——」(『能楽タイムズ』603・6月)などがある。

【能楽論研究】

石井倫子氏「天下の許され」そして「名望」——「花伝」を手がかりに——(『ZEMMI』1)は、「花伝」等に表れる「天下の許され」「名望」の語意の変化を追ひ、世阿弥の論の展開をその環境と照し合せて考へる。植木朝子氏「ばうをく」小考——世阿弥の音曲論をめぐる——(『同前』)は、「音曲口伝」で能の音曲を「祝言」と「ばうをく」に二大別した、その「ばうをく」を「茅屋」とし、茅屋を描いた水墨画などの影響下に、祝言に対立する悲しみの音曲をこの語で表現したとする。澤野加奈氏「世阿弥の「鬼」再検——「砕動風」

「力動風」の位相の変遷——」(『待兼山論叢』美学篇36・12月)は、鬼にかかわる論と能の変容を見て、「冥途の鬼」を「砕動風」に演ずることを考へる。これらはいずれも他の分野と関係するが、ここであけておく。

尾本頼彦氏「奥義」と「別紙口伝」——その先後関係と世阿弥能楽論の展開——(『芸能史研究』158・7月)は、「花伝」の成立過程の検証で、「花」の語意などを考へて、「奥義」が「別紙口伝」に先行するとする。同氏「花伝第三問答条々——第九条の増補問題——」(『東海能楽研究会年報』6・3月)も関係する論。表章氏「世阿弥と禪林用語」小考——「ジョーシキ」の語を中心に——(『禅文化研究所紀要』26・12月)は、「風姿花伝」に表れる「ジョーシキ」の語を世阿弥は争ひ心の意に解して「静識」の文字を念頭に使用したとする。齋藤祐一氏「金鳥書」とその和歌(『総合芸術としての能』8)は、「金鳥書」末尾の和歌「これをみん」の「ん」を勧誘の助動詞とし、慈円の歌によったものとする。

伊吹敦氏「金春禪竹の能楽論に見る禪の影響——六輪一露説を中心に(下)」(『東洋学論叢』27(東洋大学文学部紀要54)・3月)は、中国禅宗史研究者による長大な論文。前年の(上)で、六輪一露説が世阿弥の思想を継承しつつ組織し直したものとしたことを受け、六輪の図が「十牛図」と類似し、一露「一剣も禪に由来する」として、六輪一露説が禅思想の強い影響下にあるとする。さらに禪竹における説の変遷を追ひ、それが日本における禅思想の変化と対応しているとする。研究

史もきちんと踏まえられており、学ぶところが多い。

ジェイ・ルービン氏「『風姿花伝』の不思議な沈黙」(『能楽研究』26)は、世阿弥の伝書に能の作品の文学性を論ずることがない不思議さを述べる。金賢旭氏「稲荷の翁と禪竹の翁」(『鑑仙』199。1月)は稲荷縁起から翁を考え、禪竹の伝書に及ぶ。岩崎雅彦氏「小町の風姿」「玉造小町子壮衰書」と世阿弥能楽論」(同前504)は「玉造小町子壮衰書」の「風姿」の語から世阿弥が「風姿」を用いたかとする。

【狂言研究】

この年は狂言研究に収穫が多かったように思う。まず資料から。雲形本研究会「『翻刻』和泉流狂言「六儀」元喬本(上)」(『能楽資料センター紀要』13)は、山脇和泉家に伝えられた台本の翻刻。なんと五代元喬の台本が出現したのである。残念ながら一四曲しかなく、(上)にはそのうち七曲が収められる。若干の解説が付されるが、和泉流演出の変遷をたどる本格的な研究は今後に期待したい。小田幸子氏「『資料紹介』『間 拍子舞』の翻刻と解題」(『芸能の科学』29。3月)は、山本東次郎家蔵の大蔵虎明自筆の間狂言・拍子舞の台本の翻刻。虎明自筆資料の紹介が続く。

橋本朝生「古川文庫蔵書目録(付能・狂言資料解題)」(『能楽研究』26)は、古川久氏旧蔵書の目録で、能・狂言資料には詳細な解題を付す。能の資料もあるが、なんといっても狂言関係の資料が多く、ここにあげる。鴻山文庫(狂言関係資

料の解題は来年度刊行の予定と合せて、狂言に關しても能楽研究所が一大宝庫であることがわかう。なお「22大蔵八右衛門派三冊狂言本」の第一冊は国会図書館蔵山田弥兵衛本第十二冊の狂言台本と同内容であった。この場を借りて補っておく。

多比羅拓氏「鶯流狂言伝書保教本の注記に関する考察——「道理」考」(『学芸国語国文学』34。3月)は、享保保教本の注記に表れる「道理」の用例を検討し、編者の意識をさぐる。この編者は保教だが、同氏「鶯保教本「芸稽古伝」小考——「白人」「教方」を中心に——」(『東京学芸大学中世文芸ゼミ「面」』5。7月)は、保教ではないその本文の筆者を考えるもので、「白人所持」の本であり、「教方」の記述があることから、指導者のための実践的な狂言伝書であったとする。

次に史的研究。関屋俊彦氏「大蔵虎明と天海」序説」(『関西大学「国文学」』83・84。1月)は、大蔵弥右衛門家蔵「寛永十二年天海相伝巻子本」を機縁に、大蔵虎明と天海の関係を「わらんべ草」の記述などによって追ひ、虎明の作品解釈にも天海の影響があるかとする。根岸理子氏「泉祐三郎一座始末記」(『能楽資料センター紀要』13)は、近代に能楽に手を加えて新たな芸能を作ろうとした今様能狂言を扱うもので、能にも関係するが、ここであげる。粘り強い探索によって一座を興した泉祐三郎・房夫妻の次女薫の義理の孫という人を探し出し、得られた資料によって一座の盛衰を克明にたどる。作品研究では複数曲にわたるものから。網本尚子氏「連歌

131 研究展望(平成14年)

を詠む狂言」(『文学』3—2。3月)は、氏の狂言と連歌の関連の一連の考察を踏まえ、舞台上で連歌が詠まれる連歌盗人(富士松)等を分析して、連歌の徳を表現しようとして形成されたとする。田口和夫氏「元興寺の鬼と夜叉―説話と狂言の間―」(『文科大学「言語と文化」』14。3月)は、元興寺の鬼と夜叉が混同されて伝説化し、武悪面を使う狂言の演出に及ぶこと、そして番外曲(鬼不切)創作との関係を説く。同氏「狂言に描かれた人間像」(『能楽資料センター紀要』13)は公開講座の記録で、天正本の狂言に現れる女性像を考える。黒田弘子氏「女のオンパ・男のオンパ 中世のセクシュアリティ―」(『エスニシティ・ジェンダーからみる日本の歴史』吉川弘文館。6月)は、大蔵虎明本に見えるオンパの演技を検討し、性的誘いを示すしぐさとし、男女ともにすることから、性的欲求の感情表現におけるジェンダーはまだ成立していなかったとする。オンパへの着目がなかったわけではないし、舞台上に接していれば見落すはずのないオンパが他にあったりもするが、歴史研究者によって狂言が資料としてもに取り上げられたことに注目したい。

次に個別の作品研究。藤岡道子氏「狂言と地蔵信仰―「川上」の場合―」(『東洋哲学研究所紀要』17。1月)は、背景に川上の地が修験の文化圏であったことがあるとする。ただその上で(川上)を吉野猿蓑によるものとされるのは言い過ぎであろう。特定の地名があれば「当地狂言」ということにはなるまい。岩崎雅彦氏「地蔵菩薩と子ども―宇治拾遺物語―

第十六話と狂言「金津地蔵」―」(『日本文学』7月)も地蔵信仰を扱う。『金津地蔵』は「宇治拾遺物語」の説話の構成と類似し、その演技は地蔵オバイなどの民俗行事と共通しており、地蔵信仰のありようが反映されているとする。

中野真麻理氏「泉山伏攷」(『成城国文学』18。3月)は、泉のイメージを御伽草子等によって修験道に縁の深い鳥であったとし、その泉と山伏を対峙させたところに(泉・泉山伏)の眼目があるとする。また山伏の説文の「橋の下」の菖蒲が「和漢朗詠集」の白居易の詩にある「階の底の薔薇」から出たものとされる。そうだったのかと膝を打つ卓見である。なお同氏「泉の懸想文―越後米山薬師のこと―」(『説話論集』11集。清文堂。8月)も関連する。

内山弘氏「狂言「若菜」考」(『国語国文薩摩路』46。3月)は、天正本を読み直すもので、人物設定が江戸以降の台本と大きく違っていたとする。江戸以降の変遷に及ぶが、それには見るべき台本がもっとある。稲田秀雄氏「狂言「右近左近(内沙汰)」の作劇法」(『山口県立大学国際文化学部紀要』8。3月)は、訴訟の稽古の場面が劇中劇としてはめこまれているとし、地頭を仲裁者とする争いというモチーフに説話世界に類例が見出されるとする。田崎未知氏「狂言台本比較を通してみた狂言台本の構成―雲形本(釣狐)に即して―」(『愛知淑徳大学「言語文化」』10。3月)は、能(殺生石)との関連から考える。林和利氏「狂言「右流左止」の変遷と類型曲の系譜」(『名古屋女子大学紀要』48。3月)は、野村

又三郎家台本を紹介し、大藏虎明本に近い頃の古い演出を伝えていっているが、なぜそうなのか、全面的な検討が必要である。また『右流左止』が言葉争い物の中で重要な位置にあるとするが、前提とされる狂言の先後関係の判断基準には疑問が残る。

地方の狂言を扱うものに山本品子氏「馬瀬狂言資料の紹介(3)―「琵琶舞」「狸腹鼓」を中心に―」(『学苑』739、2月)があり、伊勢市馬瀬町に伝わる狂言台本を紹介する。副題の二曲は仙助座の狂言師から伝授されたものだとのことである。演出研究では、三浦裕子氏「楽劇としての狂言―歌謡を中心に―」(『能楽資料センター紀要』13)は公開講座の記録で、狂言歌謡を概観し、小舞謡(七つ子)を分析する。藤岡道子氏「玉手梅洲の能狂言絵―福尾家蔵扇面能狂言絵三十面―」(『聖母女学院短期大学研究紀要』31、3月)は、副題の絵を見出しでの紹介で、全図の写真を載せる。同氏「国立能楽堂蔵『狂言画帖』『能狂言画帖』の筆者は誰か」(『東海能楽研究会年報』6)もこれと関連し、「狂言画帖」は梅洲の弟菊洲、「能狂言画帖」は父棠洲のものとする。

最後に国語学的研究。小林賢次氏「言語資料としての天理図書館蔵『狂言大外』『狂言新』」(東京女子大学『日本文学』97、3月)は、こんな本まで対象とされるのかと驚くが、『狂言三百番集』の翻刻本文とのかかわりから取り上げられたもののようで、その校訂に言及する。同氏「天理図書館蔵『狂言大外』におけるシャル・サシャル敬語」(『人文学報』330、

3月)は関連するもので、『狂言大外』に「サル・サシャル」が見られるのに対して、『狂言新』では「セラル・サセラル」に統一されているとする。同氏「順接の接続助詞「ト」再考―狂言台本にみる近代語表現の流れ―」(『国語と国文学』11月)は、狂言台本における順接の「ト」の考察の続稿で、江戸中期以後の台本について検討する。

朝留和洋氏「狂言台本における「新地」と「新知」―その表記法について―」(『中央大学国文』45、2月)は、狂言の在京大名が言う「しんちを過分に拝領し」の「しんち」の表記に「新地」「新知」の両様あり、同義に用いられているとする。大倉浩氏「祝本狂言集について―狂言記・他台本との比較から―」(『文芸言語研究・言語篇』41、3月)は、前述の祝本の用語や音便について考察する。福岡健伸氏「中世末期日本語の「タ」について―終止法で状態を表している場合を中心に―」(『国語国文』8月)は、狂言台本の用例を引いて、「タ」と「テイル」「テアル」とを対比する。

遅れを取り戻すべくこの年を担当したが、目録類がまだ整っておらず、見落としがあるかと思う。ご寛恕いただきたい。また論文発表の際には、能楽研究所へも抜刷を送付してください。